英語学習教材に用いられる インタビューの談話展開方法

田中　香織

フェリス女学院大学日文大学院紀要　第十三号（二〇〇六年三月）

1．目　的

本稿の目的は、有名人が語る英語談話を分析することによって、先行研究との類型化を試みるとともに、インタビューにおける談話展開方法及びその特徴を明らかにすることにある。

2．分析方法

分析方法としては、文字化された資料から、文頭・文中・文末で使用されているキーワードとなる語を抜き出し、談話の一文一文に対して要素や内容を検討、それを独自に作成した分析表に示す。そして、その結果から久木田（1990）が明らかにした「主観直情型（東京型）」と「客観説明累加型（関西型）」との対照を通して類型化を試みるとともに、Labov and Waletzkey（1967）が明らかにした「物語の枠外で付け加えるもの」と「物語に内包されたもの」との対照、類型化を試みる。

3．資料について

談話資料には、語学教材として既刊されている『100万語[聴破]CDシリーズ③　ラリー・キング・ライブ・ベスト』（2003）を用いることとする。なお、既に文字化されたものを用いるが、教材としてのCDに録音されているインタビューが忠実に文字化されていることを確認した。

また、分析には、インタビューの一部を用いることとするが、インタビュアーの質問に各有名人が答えるというような形式で行われているため、文字化されたインタビューの中からまとまりのある内容と認められた、適当な長さと一貫したテーマがある個人的経験物語を筆者が選び採用することとした。

分析対象を個人的経験物語に限ったのは類型化がしやすいということに加え、先行研究との資料の等質性を考慮したためである。

4．話者について

資料1．J・K・ローリング（作家）
　1965年生まれ　英　ウェールズ地方出身
資料2．ジャネット・ジャクソン（歌手）
　1966年生まれ　米　インディアナ州出身
資料3．マーサ・スチュアート（実業家）
　1942年生まれ　米　ニュージャージー出身
資料4．タイガー・ウッズ（ゴルファー）
　1975年生まれ　米　カリフォルニア州出身
資料5．マライア・キャリー（歌手）
　1970年生まれ　米　ニューヨーク州出身
　（インタビュアー：ラリー・キング）

5．分　析

資料1．J・K・ローリング

資料1における個人的経験物語は、6つの要素のうちの4つの要素から構成されていることが分かる。このうち、話し手の気持ち、話の意味を伝える「評価」部分が7文中3箇所と最も多く認められた。また、内容からは、状況説明に所感を付け加えながら物語を展開していることが伺えた。

キーワードに関しては、接続詞である「and」と「because」及び、接続詞以外の「I mean」と「you know」を取り上げた。この4語を取り上げた理由としては、物語を展開する上で、接続詞が重要な役割（discourse marker）を担うことや、「I mean」や「you know」が話し言葉を研究する上で、接続詞に次ぐ重要な指標となると考えたことによる。

以上の結果、資料1の談話の特徴としては、最小限の接続詞を用い、話者の気持ちを露に語っていることがあげられる。また、「I mean」や「you know」を適時用いているところから、話者の気持ちを露に語りながらも、聞き手を意識していることが伺える。

一見、英語における談話は、客観的に展開されるように思われるが、J・K・ローリングの談話の場合は、話者の気持ちを露に語っているところから、主観的に展開された「主観直情型」と考えることができる。

資料2．ジャネット・ジャクソン

資料2における個人的経験物語は、6つの要素のうちの4つの要素＋6つの要素には含まれない1つの要素から構成されていることが分かる。このうち、個人的経験物語において最も重要とされる「評価」は④及び⑥の2箇所であることが分かるが、いずれも省略することができず、話の流れに乗せて付け加えられているところから、「物語に内包されたもの」と考えることができる。

④と⑥の内容部分からは、主観を交えて語っている部分があることが伺えるが、状況説明文に含まれた形であるところから、「主観直情型」に類似する「物語の枠外で付け加えるもの」ではないと言うことができる。

また、内容を見てみると、質問に対する応答及びまとめ以外の7文中4箇所が客観説明文であるところから、客観的に語られた物語と考えることができ、従って「客観説明累加型」に類型できるのではないかと考える。

続いて、キーワードを見てみると、順接の接続詞に相当する「and」が文頭において4回用いられていることが分かる。また、その他のキーワードとしては、特別の意味はなく用いられていると考えられる「you know」が文頭で1回用いられている。

特別の意味はなく用いられているとした「you know」であるが、この「you know」は、文頭、文中などで聞き手の同意や理解を期待するものであったり、内容を確認するものであったり、これから話すことに注意をひかせるものであったりする。また、言葉を探す間をつなぐなどの働きをすることもある。

従って、資料2は、全体的には「客観説明累加型」の特徴とされる「順接の接続詞によってひたすら状況を詳しく説明して聞かせる」という展開方法を取りながら、適度に「you know」を用いることによって、聞き手を非常に意識した「聞かせる」展開方法を用いていることが分かった。

ここから、資料2は、順接の接続詞に相

当する「and」を頻繁に用いて談話を展開していることが分かり、「客観説明累加型」の特徴とされる「順接の接続詞によってひたすら状況を詳しく説明して聞かせる」という展開方法に一致するということができる。

資料３．マーサ・スチュアート

資料３における個人的経験物語は、６つの要素のうちの４つの要素＋６つの要素には含まれない１つの要素から構成されていることが分かる。このうち、個人的経験物語において最も重要とされる「評価」は③～⑤の３箇所であることが分かるが、いずれも省略することができず、話の流れに乗せて付け加えられているところから、「物語に内包されたもの」と考えることができる。

③～⑤の内容部分からは、所感を語っている部分であることが伺えるが、「主観直情型」に類似する「物語の枠外で付け加えるもの」ではなく、話の流れに乗せて付け加えられていると言うことができる。

また、内容を見てみると、質問に対する応答及び所感以外の８文中４箇所が客観説明文であるところから、客観的に語られた物語と考えることができる。しかしながら、所感及び主観を交えて語っている部分を考慮すれば、完全な「客観説明累加型」に類型することはできず、「客観説明累加型基準の主観混合型」の可能性が伺える。

続いて、キーワードを見てみると、順接の接続詞に相当する「and」が文頭において２回、逆接の接続詞に相当する「but」が文頭で１回用いられていることが分かる。

逆接の接続詞に相当する「but」に関しては、必ずしも逆接を意味する用法で用いられているとは限らないが、資料３においても、逆接の用法で用いられたものではなく、話し言葉特有の用法であることが伺える。

以上のように、資料３で用いられているキーワードは非常に少なく、従って、「客観説明累加型」の特徴である「順接の接続詞によってひたすら状況を詳しく説明して聞かせる」という展開方法とは類型できないことが分かる。ここから、全体的には目立った「主観直情型」の特徴は見受けられないが、「客観説明累加型」の特徴とも完全には一致せず、両者の混合型であることが伺える。

資料４．タイガー・ウッズ

資料４における個人的経験物語は、６つの要素のうちの４つの要素＋６つの要素には含まれない１つの要素から構成されていることが分かる。このうち、個人的経験物語において最も重要とされる「評価」は⑥及び⑦の２箇所であることが分かるが、⑥に関しては質問に対する応答の繰り返しであり、質問に対する応答は①の導入部分ですでに述べているところから、省略することができると考えられ、「物語の枠外で付け加えられたもの」であると言うことができる。

また、⑦に関しても、⑥に対する理由説明部分であり、⑥を省略した場合には、⑦も省略しなければ意味が通じなくなるところから、省略可能であると考えられ、⑥同様、「物語の枠外で付け加えられたもの」と言うことができる。

この「物語の枠外で付け加えられたもの」は、「主観直情型」の特徴に類似する概念であるところから、資料４は、「主観直情型」の要素を持つ物語であることが伺える。

次に、内容を見てみると、質問に対する応答及びまとめ以外の８箇所が理由説明文

もしくは状況説明文であるところから、客観的に語られた部分が多い物語と考えることができる。

しかしながら、理由説明文に関しては、それが「評価」の話の意味を示し、物語の枠外で付け加えられている部分も見受けられるところから、「客観説明累加型」に類型することはできず、「混合型」の可能性が伺える。

続いて、キーワードを見てみると、順接の接続詞に相当する「and」が文頭において２回、逆接の接続詞に相当する「but」が文頭で１回用いられていることが分かる。

また、その他のキーワードとしては、理由を表す「because」が文頭で２回、特別の意味はなく用いられていると考えられる「you know」が文中で１回用いられていることが分かる。

「because」に関しては、結果から先に述べる英語において、理由を述べることは必要不可欠なことであり、また、聞き手の興味、関心を引き付ける上で、効果的な役割を果たしていると考える。

さらに、特別の意味はなく用いられているとした「you know」であるが、この「you know」は、文頭、文中などで聞き手の同意や理解を期待するものであったり、内容を確認するものであったり、これから話すことに注意をひかせるものであったりする。また、言葉を探す間をつなぐなどの働きをすることもある。

以上のように、資料４で用いられているキーワードは非常に少なく、従って、「客観説明累加型」の特徴である「順接の接続詞によってひたすら状況を詳しく説明して聞かせる」という展開方法とは類型できないが、適度に「because」や「you know」を用いることによって、聞き手を非常に意識した「聞かせる」展開方法を用いていることが分かった。

このように、資料４に関しては、「評価」部分の⑥及び⑦が「主観直情型」の特徴を現したものであることや、適度に「because」や「you know」を用いることによって、聞き手を非常に意識した「聞かせる」展開方法を用いているところから、パフォーマンス性の高さが伺え、「客観説明累加型」に類型化できる部分もあるが、「主観直情型」の特徴も見受けられたため、「混合型」である可能性が示唆された。

資料５．マライア・キャリー

資料５における個人的経験物語は、６つの要素のうちの５つの要素から構成されていることが分かる。このうち、個人的経験物語において最も重要とされる「評価」は⑥及び⑦の２箇所であることが分かるが、⑥に関しては話し始めと終わりが一貫しておらず、意味が通らないところから、省略することができると考えられ、「物語の枠外で付け加えられたもの」であると言うことができる。

一方、⑦に関しては、⑤からの続きと考えることができ、話の流れに乗せて付け加えられているところから、「物語に内包されたもの」と考えることができる。

⑥の「物語の枠外で付け加えられたもの」は、「主観直情型」の特徴に類似する概念であるところから、資料５は、一部分に「主観直情型」の要素を持つ物語であることが伺える。

次に、内容を見てみると、12文中８箇所が状況説明文であり、物語の２／３を占めていることが分かる。さらに、理由説明文を加えると、物語の５／６が客観的に語られた部分であると考えることができ、客観

的に展開された物語であると言うことができる。

しかしながら、⑥に関しては、状況説明文であるにもかかわらず、それが「評価」の話の意味、話し手の気持ちを示し、物語の枠外で付け加えられているところから、「混合型」の可能性も伺えるが、この⑥を含めても主観的に語られた部分が①の「所感」部分と⑦の「所感」部分の３箇所であり、物語全体の１／４であるところから、これを考慮する必要はなく、全体的には「客観説明累加型」に類型できると考えられる。

続いて、キーワードを見てみると、順接の接続詞に相当する「and」が文頭において３回、逆接の接続詞に相当する「but」が文頭で２回、さらに「or」「however」などが用いられていることが分かる。

また、その他のキーワードとしては、理由を表す「because」が文頭で２回、特別の意味はなく用いられていると考えられる「you know」が文頭で１回、文末で１回の計２回用いられていることが分かる。

以上のように、資料５においては、他の資料に比べ、キーワードが頻繁に用いられていることが分かる。様々なキーワードが用いられている為、「客観説明累加型」の特徴である「順接の接続詞によってひたすら状況を詳しく説明して聞かせる」という展開方法とは類型できないが、主に順接の接続詞「and」によって物語を展開し、「because」によって理由を説明するパターンが見受けられる。さらに「but」や「however」などで内容にメリハリを与え、聞き手を飽きさせない配慮や「you know」を用いることによって、聞き手を非常に意識した「聞かせる」展開方法を用いていることが伺える。

このように、資料５に関しては、「評価」部分の⑥が「主観直情型」の特徴を現したものであることや、適度に「but」や「because」、「you know」を用いることによって、聞き手を非常に意識した「聞かせる」展開方法を用いているところから、パフォーマンス性の高さが伺えた。

しかしながら、全体的には展開の要になるキーワードが「and」であることや、状況説明文が多い点などから、客観的に語られている要素が強く、従って「客観説明累加型」に類型化できると考える。

６．結　果

談話展開方法

資料１．Ｊ・Ｋ・ローリング（英）：
　　主観直情型

資料２．ジャネット・ジャクソン（米）：
　　客観説明累加型

資料３．マーサ・スチュアート（米）：
　　混合型（客観説明累加型基準）

資料４．タイガー・ウッズ（米）：
　　混合型（客観説明累加型基準）

資料５．マライア・キャリー（米）：
　　客観説明累加型

特徴

パターン１：
　ほとんど順接の接続詞だけを用いて談話を展開（資料２）

パターン２：
　順接の接続詞を用いながら、適度に「but」「you know」「because」を用いて談話を展開（資料４、資料５）

パターン３：
　ほとんど接続詞は用いずに談話を展開（資料３）

パターン４：

順接の接続詞に加え、「you know」「I mean」などを用いて談話を展開（資料１）

7．まとめ

以上、分析の結果、展開方法に関しては３つのパターンが、特徴に関しては４つのパターンが認められた。これらのパターンは田中（筆者）の修士論文（2003年度）で認められたパターンと一致しており、英語におけるインタビューの特徴を示唆するものであると考える。

これら、英語学習教材におけるインタビューの特徴を明らかにすることは、自然談話との違いを明確にし、外国語学習教材の開発や実際の外国語指導に役立つと考える。

しかしながら、本稿の問題点としては、資料の少なさや、話者の出身地にばらつきがあることなどが挙げられるため、資料の数を増やし、地域ごとに談話展開方法の分類を行うことによって、英語（インタビュー、自然談話）の特徴を明らかにしていく必要がある。

また、久木田（1990）で明らかにされた地域差が、英語におけるインタビューにも認められるか否かを明らかにしていくとともに、対日本語インタビュー、対日本語自然談話などの対照分析を進めていくことも望まれる。

付記

本稿は、日本学術会議加盟学会である言語人文学会、第６回オンライン研究発表会で発表したものに加筆したものである。オンライン研究発表会の際、盛岡大学の高橋幸雄先生から御教示賜った。記してお礼申し上げる。

分析資料

『100万語[聴破]CDシリーズ③　ラリー・キング・ライブ・ベスト』（2003）朝日出版社

参考文献

荒則子（2003）「方言談話における計量国語学的類型論」『日本言語学会　第127回大会　予稿集』

久木田恵（1990）「東京方言の談話展開の方法」『国語学』　162

齋藤孝滋編（1999）『地域言語調査研究法』おうふう

須崎由嘉（1999）「東西方言折衝地における談話展開の社会言語学的研究」『日本語学会　第198回大会予稿集』

泉子・K・メイナード（1993）『会話分析』くろしお出版

泉子・K・メイナード（1997）『談話分析の可能性』34-44　くろしお出版

園部美由紀（1997）「豊橋方言における談話展開の方法」『名古屋・方言研究会　会報14号』

田中香織（2002）「英語における談話展開の方法―日本語における談話展開の方法との比較―」『日本言語学会　第124回大会　予稿集』

田中香織（2003a）「スペイン・ガリシア地方出身者が話すカスティーリャ語談話展開分析の試み」『日文大学院紀要　第10号』フェリス女学院大学大学院　人文科学研究科

田中香織（2003b）「談話展開研究に関する方法論の日米対照研究―談話展開の対照言語学的研究のために―」『社会言語科学会　第11回研究大会　予稿集』

田中香織（2004）「談話展開方法の類型論的研究」フェリス女学院大学大学院　博士前期課程2003年度修士論文

野崎希世江（1996）「江戸語における談話展開の特徴」『名古屋・方言研究会　会報13号』

畑中宏美（1994）「富山県氷見方言の談話展開の方法」『北海道方言研究会二十周年記念論文集　ことばの世界』

Labov, William and Joshua Waletzky (1967) Narrative analysis: Oral versions of personal experience Essays on the Visual and Verbal Arts 12-44 University of Washington Press

Labov, William (1972) Language in the Inner City Philadelphia: University of Pennsylvania Press

（本学博士後期課程）